

インターナショナルスクールや現地校から転入してきた 生徒の国語力の向上

前カイロ日本人学校 教諭

新潟県刈羽郡刈羽村立刈羽中学校 教諭 小澤 昇

キーワード：インターナショナルスクール、現地校、国語力、日本の高校への進学

1. はじめに

カイロ日本人学校は、30名前後の小規模校である。両親が子どもを通わせる学校として、日本人学校やインターナショナルスクール、現地校と様々ある。小学校の高学年になるにつれて、中学校卒業後の進路を検討し始め、日本の高校への進学を希望すると、それまでインターナショナルスクールや現地校に通っていた児童生徒が、日本人学校に転入してくるケースがある。日本の高校を選択する背景には、昨今のエジプトの社会情勢も大きく影響していると思われる。

このような児童生徒は、英語または他の外国語に堪能だが、国語力が日本の中学生に比べて低下していることがある。そこで、このような児童生徒の国語力を向上させるために実践したことを紹介する。

2. 生徒の実態

(1) インターナショナルスクールからの転入のケース

両親とも日本人で、親の仕事の関係で幼少期から外国で生活している。日本での生活経験はほとんどない。日本の学校は、一時帰国時の体験入学程度である。日本の高校進学を決断すると、インターナショナルスクールの卒業や進級のタイミングで、日本人学校へ転校する。このような生徒は、とても流暢な英語を話し、英語でのコミュニケーションは堪能である。しかし、国語力は、家庭での日本語教育の成果もあるが、どうしても日本の中学生と比べて国語力は低く、漢字の読み書き、言葉の意味を知らないことによる読解力、文章を書く力に劣ることが多い。

(2) 現地校からの転入のケース

両親が国際結婚をして、エジプトで暮らしている生徒である。多くは、父親はエジプト人、母親が日本人である。父親が、エジプト人としての成長を願い、現地校に入学させるケースが多い。日本での生活経験は、数週間程度の一時帰国以外にほとんどない。しかし、子どもの成長とともに高校進学を日本の高校に決めると、日本人学校に転入する。その年齢は様々であるが、小学校4～6年頃が多い。このような生徒は、アラビア語と英語に長け、この言語でのコミュニケーションには問題がない。国語力は、インターナショナルスクールからの転入する児童生徒と同様である。

3. 指導の実際

日本の高校への進学を考えて、日本人学校への転入である。生徒や特に保護者が求める国語力とは、それぞれ志望する高校の受験に対応できる力となる。国語力を向上させるために、国語の授業で強化したことは当然であるが、それだけでは遅れを取り戻せないと考え、あらゆる場面でその強化を図った。国語力が低位の生徒に対して私が行った取り組みの概要を以下に記す。

定を予めこの「Daily Life」に記入したりもした。

②読書

読解力の向上や語彙を増やすには、読書が最適と考え読書を勧めた。読んだ本を記録する表を掲示し、読書への意識の継続と仲間の読む本を紹介した。毎朝、朝読書の時間があるので、本は常に身近にある。長期休業では、読書の冊数を指定し、読んだ本の読書紹介文を250字程度で書いた。また、どのような本を読めばいいのか、図書館の紹介も行なった。読解力を身に付けるには、文学作品が効果があると考え、読書を継続して行うために自分の興味関心のあるテーマの本を勧めた。

③学習発表会で演劇発表

カイロ日本人学校の学習発表会は、学年ごと（中学部はひとつ）に4月から学習した成果を発表する場である。中学部では、国語力の向上に力を入れてきたので、その延長で「向田邦子の世界」と題した劇を演じた。読書に親しむことも狙いにして向田邦子の作品を多数読み、登場人物の心情を中心に読み解き、読解力の向上と語彙を増やすことに力点を置いて学習を進めた。生徒それぞれが、向田邦子や邦子の父や母の人物像を描き、それを基に役作りして劇で表現した。邦子役、邦子の父親や母親役は生徒を固定せず、幕によって配役を変えたので、思い思いの人物になり切って演じた。

④放課後学習会や長期休業での補習

生徒や保護者からの要望により、週1回、放課後に1時間30分程度の学習会を行なった。カイロ日本人学校は、放課後に部活動が無いために実現することができた。下校時は、スクールバスを他の児童生徒が使用していて無いので、保護者の責任で帰宅した。生徒が学習したい教材を持参し、不明な点を教員に質問する形式をとった。当番を決めて全職員で指導にあたった。

4. 成果と課題

カイロ日本人学校では、国語力の向上が普遍的課題だと考える。それは、上記のような児童生徒がいるからという理由だけでなく、外国で暮らすことで日本語に接する機会が日本の中学生と比べて少ないからである。また、カイロ日本人学校のように少人数だと児童生徒同士からの言語的な刺激が少ないからという理由もある。だから、教員が日本語に触れる機会を意図的に増やすことが必要であると考え。そこで、上記のような取り組みを行った。

どの程度の国語力が身に付いたのかは、客観的にはよく分からない。年に数回受験する統一模試の国語の結果をみると、点数は横ばいで成果があったとは言い難い。しかし、以前に比べて漢字の読み書きができるようになってきていることは明らかで、だからこそ、漢字検定にも挑戦しようとする意欲につながったと考える。社会科でも、重要語句の小テストを授業で毎回行っているが、漢字のテストを兼ねているため、漢字で答えることを課している。以前は、人物名など難解な漢字は覚えられなかったが、少しずつ覚えて答えることができるようになってきた。音読も、まだまだ不十分ではあるが、スムーズに読めるようになってきている。200字程度の文章を書くことにも、内容はともかく抵抗感が減退していることは明らかである。何より、努力すれば目に見えて成果が出ると、学習意欲を向上させたことが大きな成果であると考え。その証拠に、統一模試の5教科合計の偏差値は、着実に向上している。

このような成果が上がったのも、保護者の協力があってからだと考える。スクールバスで下校しなければならず、放課後の部活動等がないので、家庭学習が重要になってくる。学習時間を管理したり、時には質問に答えたり、または、教材を日本から調達したりと、保護者の役割はとても大きい。その分期待も大きくなる。教員は、そのような期待にも応えるべく、専門性や知識を生かし最善を尽くさなければならない。教員としての技量が直接問われる。国語力の向上は、時間がかかり特効薬がないように思う。でも、高校受験を考えると悠長なことも言っていられない。今後も、生徒の意欲を喚起させ、効率よく国語力を身に付ける方法を考えていきたい。